

社会科学における弁証法的理論と分析的理論

速 川 治 郎

いわゆる社会の批判的理論と批判的合理主義との間の論争について考えてみたい。前者にはアドルノ、ハーバーマス、後者にはポパー、アルバート等が属していることは周知のことである。その論争に関して重要な本は「ドイツ社会学における実証主義論争」である。この本の訳者である城塚登氏は三つの決定的相違点をあげている。すなわち、1、事態そのものについて、2、歴史の把握、解釈について、3、歴史的、理論的研究の価値自由についてである。しかし、1、については一層正確に言うならば、事態を重視する弁証法的理論に対して、批判的合理主義は問題を重視する。2、については更に解釈学的立場と反証可能性との対立を考えるべきである。また、4、として弁証法的論理と形式的、分析的論理との対立を付け加えるべきである。城塚氏のように「論争」を整理して解説することは必要であるが、このことによって「論争」の重要な面を消滅させてしまうことも確かである。そこで弁証法的理論と分析的科学的理論との対立論争の出発点として「論争」の序文（これは「論争」の一種の結論にもなっている）を検討してみよう。

序文でアドルノが主に論じているのは弁証法（総体性、実証主義批判（ポパーは自分が実証主義者と呼ばれること

に反対しているが」、自然科学主義批判を含む）、価値自由についてである。まず弁証法の特質を述べてみよう。弁証法はその対象から独立した方法ではない。したがって弁証法をそれだけで叙述することはできないのである。弁証法の定義付けをすることはできるが、定義付けられた基準に従って弁証法が論理展開するわけではなく、むしろ重要なことはその基準を批判するのである。この考えは弁証法があらゆる物事を考える場合の基盤となるもの、つまり根源をもっていないということになる。しかしアドルノの主張を理解するならば、それにもかかわらず一種の根源が浮上して来ると言えよう。それは形式論理学を固執して、他人の主張の非論理性を追求するあまり、自分自身の考えるべき内容が貧弱になってしまう人たちは異なるのではあるが。

アドルノの弁証法的論理を更にとりあげてみよう。彼は社会的個々の現象を社会の複雑に入り組んだ網状組織から考えていこうとする。世上、物事を一面的ではなく、多面的に捉えていくべきであるというのと似ている。しかし、そう言うただけで本質が隠されたままであるならば、そのことは非本質であると考えるところがアドルノの特徴であろう。弁証法的思考は隠された本質、すなわち非本質が現象と矛盾していることや個々の人間の現実生活と矛盾していることを批判する。なぜならば本質は現象しなければならぬし、現実生活上に現われなければならぬからである。たとえば社会における人間の自由、平等が守られていなければ本質は非本質であり、現実と矛盾している。

形式論理学に対する批判という形で、間接的に弁証法的論理の特質が述べられる。論理学は抽象的手続きを行い、他から攻撃を受けないように制御され、こうして恒真命題を意図的に提出している。論理学的に自由に思考し、処理しようとする意志は自由に思考し、処理する対象を排斥し、除外してしまうことになる。その限りではその論理は非真理であると言うのである。一般に形式論学者は抽象的記号によって思考して、精密な一義的論理を構築し、それが

すべての命題に適合できると主張するし、また、それによって命題分析を行っている。このことはアドルノ的には制限しながら、制限をはずしているということになる。形式論理学の優先は自然科学主義に立つ学問によく見られることであるが、この立場の人と討論を進めた場合、論理性が絶対必要であるとその人が言ったことが、論理学の絶対的優先権をえたことになるかどうか。論理的な考えである手段をもって論理学を反省しなければならない。そこで手段が優先することになる。しかし手段は論理をもっているのではないかと言え、反省しなければならない論理が反省されていないことになる。

社会は理解できるし、理解できないのであって、このことが一つになっている。社会は主体の集まったものであり、主体相互に交換できるという事態である限り、事態は主体的行為という意味を内包するので、理解できる。しかし、その事態はダイナミックな力をもつので、論理的理性のモデルから離れてそれ自体自立したものであり、理解できないのである。主体としての社会と客体としての社会は同一であるが、しかし、同一ではない。すべての認識主体が社会であり、客体であり、また逆に社会、つまり客体が認識主体である。その限りで同一である。しかし、対象化、客観化する科学の行為によると、社会を客体だけにはしていないもの（主体）を社会から排除してしまう。その限りでは客体と主体とは非同一であるが、しかし主体の影、働き、作用がすべての自然科学主義客観性に入り込んでしまっていることについて、自然科学主義者は何も語ろうとはしない。そうであればそのことにおいてまたもや主体の働きが浸透してしまっている。

矛盾の形態は社会の構造に現れることが重要であるから、論理的矛盾の排斥だけであってはならない。現実の社会を変革することによって論理的矛盾を除去できるのである。思考でないものが思考自身の意味に属しているというこ

とに気付く思考は無矛盾性の論理を打破してしまう。弁証法的矛盾は現実の敵対状態を表すのであり、形式論理的、自然科学主義的思考体系の内部では見出せない。

個別的なもの、個別的現象についての弁証法的規定は、特殊なものであると同時に普遍的なものであるということを示す。個別的現象において、すでに特殊な社会構造から出て来る法則性が含まれているからである。社会的法則概念として、「…である時にはいつも…である」という形ではなく、「…であるからには…でなければならない」という形が示される。

ヴィトゲンシュタインは自分にはゲオルク・トラークルの詩が分らないが、それにもかかわらず、その詩の優れていることは固く信じて疑わないとフィッシャー宛の手紙の中で書いている。そうするとヴィトゲンシュタインは言い表わせないものを言い表わすことになる。

弁証法的論理は全体を常に考える。しかしその論理は全体、言いかえれば全体的理性を崇拝しているわけではなく、むしろその理性を批判するのである。そして弁証法的論理は分析的論理のように個別的解決を行ったからといって高慢になることはしないし、また分析的論理により個別的解決ができたからといって弁証法的論理は黙ってしまうことはない。弁証法的論理が無矛盾性の論理を批判するのはそれを通用させなくしてしまうというのではなくて、むしろそれを反省するのである。（しかし、筆者は反省するだけでなく、反照論理学を考えなければならないと思う。）弁証法は分析的方法が自然科学的方法という権威をふりかざして研究し、その成果をあげて思考を止めてしまったところを超えて、さらに突っ込んで思考しようとするのである。（筆者から見ると、アドルノの場合は、とくに記号論理学の知識が不足しているので、思考を止めてしまったところが彼に分っているのかどうか不明である。）

弁証法的論理によれば、総体性（全体）はすべての個別的主体を前以って秩序のある状態に置いている。なぜならば個別的主体はそれ自身において総体性によって拘束され、単子論的構成をとっているが、総体性を表象するからである。その限りで総体性は最も現実的なものである。しかし総体性は個人相互の社会的関係の総括であるが、この関係は個人を遮蔽しているので、仮象であり、イデオロギーでもある。これだけでは読者によく理解できないかも知れない。総体性は物自体としての社会である。それは総体性を物としてしまう危険性をもつのであるが。それは不自由な解放されない人間でもある。こうして個々人は社会である総体性のモメントであり、総体性と不可分離的にある。

アドルノの科学主義批判を私の解釈により述べよう。ポパーは社会科学の方法と同じであると考え、試行錯誤を主張するが、それは諸モメントを犠牲にして進められるのであり、また諸モメントを排除してしまつて、問題が自然科学を使用するのに都合のよいように整理され、時としては見かけ上の問題となっているだけの場合もある。筆者の考へでは社会は初めから自然科学主義的方法を使用すると決めて研究されるのではなく、社会は人間の「間」^{あいだ}においてあるから、人間に基礎を置き、間として一つになったものが人間を包括、構成しているのである。それは具体的には政治における現実となつて現われて来る。社会の客観的法則には矛盾に満ちた性格、最終的にはその法則の非合理性、つまり自然科学的合理性の網の目からもれている事柄、人間の本質的なものが付け加えられ、これらをも人の間としての社会に関しては考慮すべきものである。物理学部門ノーベル賞受賞者、江崎玲於奈氏は次のような趣旨のことを言う。科学技術の進歩は一般的に経済成長をもたらし、多くの人に恩恵を与える。その進歩はまた知的個人生活をより豊かにするという点ですべての人に福祉を与えるのが理想であらう。しかしアメリカの現状ではこの理想

の達成は疑問である。科学技術の進歩が「多くの人に恩恵を与える」が、しかし害悪をもたらすこともある。その進歩はいずれにしても人間のためにあることを忘れてはならない。豊かな知的個人生活とは自然科学主義的枠内での福祉であるが、江崎氏も指摘するようにアメリカ社会の特殊性、すなわち価値観の異なる多民族社会は個人主義の社会であるから、人間関係は相互に容易に理解し合えるものではなく、また一団となって容易に同一行動できるものではなく、単一化、単純化、同質化できる自然科学主義的枠内に入らないものでもある。アメリカにおける民事訴訟事件の増加がそれを示すのであり、両親の育て方が悪いと訴える場合すらあると江崎氏は言い、それが「ひどい話」であると彼が言う時、合理的な自然科学者が人間の非合理性に気付いたと言えるであろう。

価値と価値自由についてのアドルノの主張は次のようになる。価値と価値自由（価値中立）という二分法が神聖不可侵なものとすることに對する批判が行われる。つまり価値と価値自由とは分離できず、相互に他者が自己内にあるのである。厳密に非政治的な態度が政治的なものもろの力の動きの中に知らないうちにはまり込み、政治的なものとなり、権力に降伏することと同じ様に、一般に価値中立性は自然科学主義者にあてはまる価値体系に知らないうちに従っていることになる。

アドルノのかなり長い序論に對して批判的合理主義者ハンス・アルバートは皮肉に満ちた論文「膨大な序論に對する短いあとがき」を「論争」の最後に書いている。その中心的主張は次のようになる。アドルノの実証主義概念はあいまいであり、彼自身で勝手に考えた実証主義を批判している。アドルノは批判的合理主義には論理学の絶対的優

位があると思っているが、この考えは適切ではない。アドルノは現実的敵対関係を弁証法的矛盾とするが、彼はその矛盾が無矛盾性の原理を侵すことではないという主張には耳をかさない。批判的合理主義は非政治的哲学ではない。形式論理学を使わなくてもこと足りるとする弁証法はドイツ思想の中で最も危険なものである非合理主義へと傾くように思われる。アルバートは非合理主義という語でもってナチズムを暗示しているようであるが、もしそうであるならば、それは極論であろう。アルバートは形式論理学を使わなくてもこと足りる弁証法という意味のことを言うが、形式論理学者でもない限り、形式論理学者のように論理法則、規則をその都度意識して科学理論、社会科学の哲学は研究されていないので、「使わなくてもこと足りる」という研究状態はありうるし、また形式論理学的に考え過ぎて、たとえば社会科学の研究をしているのに、論理的詮索をし過ぎて、かえって社会科学そのものの研究が貧弱な内容になってしまふことはありうる。ところでアドルノは無矛盾性の原理、つまり矛盾律を必要ないものとは考えていない。このことは彼の叙述から分る。しかしアドルノは論理学の知識が貧困なので、この面から彼の主張に疑問を感じることは確かである。ヘーゲルの「論理の科学」の中で形式論理学が不必要であるとは書かれていない。客観的論理学は部分的にはカントの超越論的論理学であり、主観的論理学は概念の論理学であり、即自的に存在する概念から向自的に存在する概念へと生成する運動の論理学である。アドルノは事態そのものの中にある概念と言うがこれはたとえば「交換の法則」であり、向自的に存在すると言うこともできる。そこでは形式論理学批判が行われており、その論理学の中にそれを考える自我自体が浸透してしまっていることに気付いて論述されているのである。このことが分っていないなら、あるいは分ろうとしないならアルバート流の批判が提出されうる。しかしこのことによってアルバートという自我が自分の論述に入っていることは否定できない。筆者は序文とあとがきを述べたことによって「論

争」の概略を示した。ここから論題の核心へせまりたいと思う。

アドルノは「社会学と経験的研究」の中で、自分の思想をこう述べる。総体を構成するにはまず第一に事態の概念が必要なのである。この概念に基づいてばらばらのデータが組織形成される。量的に分析する者は初めに諸要素の質的な差違をまず度外視しなければならない。だが量的分析と質的分析は、そのように度外視する限り相互に他者と関連しなければならず、二つの分析の対立は絶対的なものではない。社会における個々のものはそれ自身の中に普遍的な規定をもち、この規定に相応するものが量化して一般化されたものである。だがその規定独自のカテゴリーはいつも質的である。

社会科学における諸法則の普遍性はモザイク・タイルのような個々の断片がすき間なくびったりはめこまれる壁のような概念的外延の普遍性ではなく、常に本質的に普遍的なものと特殊なものとの関係をもち、この関係は歴史的に具体化されるのである。普遍的なものと特殊なものとは不一致でありながら、統一している。

社会科学においては形式論理学上の外延という概念とはまったく異なった概念的なものが全体を構成しており、そこでこの全体は媒介された概念の本質である。したがって社会は有機体よりもシステムに似ている。そう言っても自然科学のように部分から全体へ進むことは許されない。

「社会科学の論理」というテーマでポパーとアドルノはそれぞれ自分の思想を展開する。

ポパーは27のテーゼに分けて論述しているが、彼の重要な意見を区分して述べてみたい。(1)絶えず増大する知識と

無知との関係を明らかにするのが認識論の重要な課題である。これは筆者が考えている「問」の論理の一例となる。 (2) 認識は問題と共に始まる。推定した知識と推定された事実との間の内的矛盾、正確には外見上の矛盾を見出すことから問題が生じるのである。この考えにはのちにアドルノが反対する。つまりそれは次の通りである。上の矛盾は主観と客観との間に生じる単に外見上のものであり、主観が不十分な判断を行ったということで責任を取るようなものである。しかし矛盾は実際に事態の中にあり、知識の増大によって、あるいは明瞭な定義をするならば、除去できるものではない。この一例としてヘーゲル法哲学の中の一文が提出される。その意味の概略は、人間は自分の要求を満足させるために人間のつながりが広がりそれを普遍化し、生産手段も普遍化して、富の蓄積が増大するが、反面特殊労働が個別化され、労働者階級はこれから離れることができず、しかも貧困が増大するということである。普遍が特殊と、富裕が貧困といわゆる敵対関係にあることが矛盾であるというわけである。問題というものは実践的なものであり、現実の世界の中にある未解決な状況なのである。こう批判するアドルノの矛盾は形式論理学的矛盾ではないので、その矛盾をポパーが排斥したことはならない。ただしポパーの「論争」の中の論文では認識論的な問題が強く打ち出されている。また、たとえば貧困、文盲、圧政、不安定な法秩序という実践的問題はアドルノと違って論理化されて理論的問題となる。ここから科学的業績が出て来るというのである。このような認識論的・理論的問題に対するアドルノの批判は一考に値するであろう。(3) 問題の解決案は提出されたり、さらに批判されたりする。解決案が事実に基づいた批判を受けつけないならば、その案は非科学的なものとして排除される。この意見にアドルノは反対する。この批判の意味が事実へ還元すること、観察されたものによって思想を展開させることであるならば、思想を仮説にまで落としてしまい、社会科学から先見の明となるような契機を奪うことになる。アドルノにすれば、

思想は自然科学における単なる仮説ではなく、社会的実践的な理解であり、事実そのものは社会によって媒介されており、社会こそが問題であるから、その理論は人間のテロス（目的）となっている。ポパーに戻ろう。(4) 科学の方法は試行錯誤の方法である。(5) 社会科学者は価値自由と客観性を確保しようとしても自分自身が帰属する社会層からはとんどのがけられない。(6) 科学的客観性は科学者が相互に批判し合うという社会的できごと、科学者の友好的あるいは敵対的な分業、科学者の共同研究、対立し合った研究、これらの社会的できごとである。このような主張をアドルノは是認する態度はとっているが、ポパーの中に自然科学的な影を感じていて、それに反対する。試行錯誤の考えにも、アドルノはその影を感じ、それに対して拒否反応を示すのはあまりにも過敏ではなからうか。ポパーの、(7)は、科学外の問題、たとえば人類の福祉の問題、あるいは国防、軍事攻撃政策、産業発展の問題に対する関心であるが、このような科学外に向っている関心を科学的研究から排除することはできない。科学的に批判するという使命の一つは価値が混合していることをあばき出し、真理、重要性、単純性等を問う純粋に科学的な価値を科学外の事柄を問うことから分離することなのである。(8) 真理である前提から結論を引き出すものが演繹論理である。こうして記号論理の有効性が認められる。そして真理は、一つの立言が事実と一致するか、対応する場合、あるいは事物が立言の述べるような状態にある場合に、その立言が真であると言えよう。ポパーのこの主張はタルスキーの数学的論理学の中にあるものであり、真理の相応論である。(9) 社会科学は人間の状況（心理学的要素を排除したもの）を十分に分析することによって成立するのであり、このように分析された状況下にあったならば誰でも同じ行動をとるだろうと言えるようなそういう状況を問題にする。これが状況の論理と呼ばれるものであり、この論理は物理的な世界（この中でわれわれは行動する）を前提としており、さらにある社会環境の本来的な社会的性格を規定する社会諸制度、たとえ

ば八百屋、大学、警察権力、法律、教会、国家、夫婦を前提にする。(10)認識論が個別科学、哲学にとって重要である。われわれは自分自身の理論を合理的に正当化できないが、合理的に批判できるし、よいものを悪いものから区別することはできる。そしていつまでもわれわれはよりよいものを求め続け見出すのである。以上がポパーの社会科学の論理についての私の解釈である。ポパーの考えには自由に批判し合える人間、自己反省できる人間が前提としてある。よりよいものが見出されるというのは、より悪いものが見出されることでもなければならぬ。悪いものが常に存在し続けることがあり、これを批判し、実際にいつまでも排除し続けなければならない。よりよいものが見出され続けるということの中に、自然科学的發展という特質が目立たない状態であるにせよ残っている。

次にアドルノの「社会科学の論理」であるが、すでにその若干のものは述べた。さらに彼の主張をそれに付け加えておこう。ここでは社会、自然科学的方法に対する批判が中心になっている。事態そのものである社会は斉一、単純なものでもないし、不変不党の状態でカテゴリー化されるものでもなく、比量的論理学のカテゴリー体系が、その対象について前以て予想しているものとは異なっている。社会は矛盾に満ちてはいるが、規定できるのであり、合理的と非合理的が一つになっていて、体系であり、まとまりがなく碎けてしまっており、隠れて何も見えない自然であり、意識によって媒介されている。アドルノの矛盾は現実の敵対関係であるから当然規定できる。合理的という意味が形式論理的、数学的なものであるならば、社会はそれによって規定できるが、規定できること自体「私」の規定であり、規定できないものをも「私」は知っている。その限りで合理的表現は規定できないものを自己へ反映して自己の内に含んでいる。そこで社会の体系的であることそのことが碎け散ってしまうことになる。絶対的に固定された体系はすでにそのことにおいて碎けてしまっている。

アドルノによれば社会科学は明晰性と精密性にとられ過ぎると、その科学が認識しようとするものをゆがめてしまいか、そのものを見失ってしまうことになりかねないとなる。筆者は形式論理学者が明晰性、精密性を守るために「私が考える」ということを誤解している事実を体験している。いわゆる客観的真理、たとえば同一律が人間の意識から独立していると言っても、そう言った時にはすでに「私」がそこに介入して、同一律を「私が考える」が、このことが消失しているながら存在しているのである。「ダイヤモンドは鉱物中で一番かたい」と私は考える。」あるいは「ダイヤモンドは私にとって鉱物中で一番かたい。」という場合、そこには恣意的に私が考えるということが現われ、このような表現は確かに不適切である。しかし「ダイヤモンドは鉱物中で一番かたい」という表現は人間がかかわらないで出て来たものではないし、この表現は真であると考えている「私」がいなければそのように表現することもできない。「……と私は考える」、「私にとって」が勝手気ままに思念するという意味をとるならば、それらは必然的に先の文章表現からは消失しなければならないが、その文章を問題にし、考える「私」が常に存在していることを存在しないとは言えないので、このことを「私は考える」という表現で示すのである。またそのことは、私が「ダイヤモンドは鉱物中で一番かたい」と言ったり、書いたりしたその時、それは常に私にとってあるということである。ところでアドルノの主張では明晰性、精密性は重要でないようにとれるが、十分な認識をする一つの手段としては明晰、精密な主張文が必要である。社会科学において提出される解決が大胆で独創的であるための一契機としての明晰性、精密性を無理に捨てる必要はない。

アドルノによれば社会である事態を認識する場合、それは当為から自由になって単に存在しているものではない。すなわち事態の認識に際し、認識することによって価値中立があるのではなく、むしろ当為、別言すれば価値

が出現しているのである。このことはアドルノ自身もあげているが、ヘーゲルの考え方であり、また価値出現はポパーも否定してはいない。アドルノは外側からはすべてのものが反駁でき、何ものも反駁できないと言っているが、これはポパーが信頼する自然科学に反対するアドルノにもあてはまることであり、アドルノは自然科学に対する知識がかなりあって、その批判をしているとは思われない、それに對してヘーゲルの場合は当時の哲学者としては自然科学あるいは数学の知識がかなりあって、それを批判していることが分かる。アドルノは新マルクス主義者と呼ばれるが、ヘーゲルにひきずられているので、またアドルノは語れば語る程ヘーゲルが考えたところへおちこんでいることに気付いていないようである。

アドルノによる社会をさらに述べてみよう。人間は客観的現実によって囲まれ、制御され、形成されるが、しかしまたその現実には反作用をおよぼす。このように働いている過程全体が社会なのである。社会はまた総体性でもある。この中で作用し、相互に完全には還元できないすべての契機が認識の中へ入って来ることが考えられうる。総体性としての社会が科学的分割、分業の暴力によってゆがめられてしまっただけではない。アドルノの言うすべての契機の一つとして個別科学を考えれば、それは暴力にはならないであろう。ただし社会科学の一分野の専門の学者は他の諸学から批判されると、それは内在的批判ではないと言って、それを拒否する傾向がある。その学者にとってたとえ外在的な批判であっても、自己反省の契機にできるかどうかを考える必要はある。

アドルノは、社会を現に存在する社会とは異なったものと考えることのできる者にとってのみ、社会は問題となる、すなわち現状の社会はあるがままの社会でないものによってのみ、あるがままのものとして現われると言うが、ここには現状を革新しようとする目標をもった人間の立場が現れており、一定の立場をもたない哲学、社会科学を彼

は主張しているが、そう主張することによって一定の立場が現れている。こうしてアドルノが望むものは人間それぞれの境遇が人間に対して襲いかかっている魔力からの解放であり、これによって社会を正しく建設することができる。このことが人間の自由を抑圧している社会の変革であり、*reductio ad hominem*（人間への復帰）となるのである。

ハーバーマスはアドルノの思想を補足する形で「分析的科學理論と弁証法」という論文を提出する。ハーバーマスは総体性、解釈学、歴史的合法性、価値自由を弁証法の立場から述べていると言えよう。彼は総体性に関してアドルノの文を引用するが、その意味するところは次の通りである。社会的総体性は、この総体性によって総括されるもの、つまり契機をもつが、このものの上部で固有の活動をしているのではない。またその総体性は個々の契機を通して総体性自身を生産し続ける。生活全体というものはその要素が共同し合ったり、敵対し合ったりする関係から離脱することはできない。これと同じ様に、要素が要素としての機能を發揮しても全体についての洞察がなければ理解されない。それもそのはず全体は個々のものの運動の中に全体の本質をもつからである。体系と個別性とは相互関係を持ち、この関係においてのみ認識されうるのである。アドルノの表現は明らかにヘーゲル的である。総体性はすべての要素の集合、クラスではない。また体系という概念を形式的に関数における相互依存的関連とするのはアドルノの表現は違う。なぜなら関数が社会的行動における独立変数と従属変数との間の関係と解釈されるからである。関数では他者が自己の内へ入るといふ弁証法的特性がないということをハーバーマスは言いたいのであろう。社会についての分析的經驗科學的理論は、仮説を演繹すること、經驗科學で使われる計算によって連関を組み立てること、この

二つのこのために必要な形式論理學上の規則にハーバーマスは批判的であり、また経験上から言って有意義な法則的仮説を導出させるような単純化された基本的仮説を立てるべきだという主張に対して彼は反対する。たとえば構文論的な枠内で理論を考えるならば、それは論理的には真であっても、理論の内容は貧弱なものしか出て来ない場合が多いというわけである。湯川秀樹が「(自然) 科学は抽象的なもの、人間離れしたものと受けとられやすいが、じつは人間性と深いつながりがあるものだ」と言ったが、これは哲學者からみれば当然のことであり、抽象的なものは人間の頭脳行為の結果であり、抽象的なものそのものが自然の中にあるわけではない。同様に形式論理學上の規則も人間性と関連しており、きわめて人間的なのである。このことによって人間社会を予め決定されたものにあてはめてこゝと足れりとするわけにはいかない。単純化された基本的仮説も必要であるが、仮説であるからには不適當であれば変えられうるという自覚をもたねばならないし、単純化によって社会を明確に表現できても、それを十分に理解、解釈していないならば、その明確がかえって非科学的なものとなってしまう。

ハーバーマスは社会的な生活連関を総体性として把握する。そして弁証法の理論はその生活連関にみずからを適合させ、生活連関は何よりも重要であるからその理論の中にそれは現れていなければならないのである。こうして社会生活が営まれる世界をありのままに解釈する自然的解釈學をハーバーマスは提唱する。ポパーの主張する命題的仮説的演繹的連関ではなく、生活連関、生活世界の意味を解釈學的に説明しようとする。これだけでは二人の主張に決定的差がないようにみえるが、仮説的演繹的連関は自然科学的方法に立つのに対して、解釈學的説明は自然科学では捉えられない人間生活の意味を考えると解釈すればその差は一応分るのである。

社会の弁証法概念においては分析的道具と社会的構造とが齒車のようにかみ合わなければならない。こう述べる

ハーバーマスはさらに総体性の解釈学的な先取りが単なる道具以上のものであることを実際に示さなければならぬし、解釈の進むにつれてその先取りが正当であるということ、つまり事態に適合した概念であるということを実際に示さなければならぬと言う。だからこそ彼独自の解釈学が示されるわけである。しかしこの解釈学を形式論理的思考で捉えうるという反駁はかならず現れる。事実、弁証法的論理学、解釈学を形式化する研究はいくつかある。ハーバーマスの自然的解釈学も形式化可能である。ただし解釈学の先取りは論理学的形式化のあとに出て来るのではないであろう。これに対して先取りはどのように証明されうるのかということが論争になるであろう。証明されたということは論理的斉合性があったということではないのか。斉合性は単なる立言形式だけの論理展開なのか。解釈内容がそのまま立言形式を含むと言えるのではないのか。さらにはハーバーマスは事態である生活世界を十二分に解釈しつくすということなのであるか。しかし解釈しつくすことができるとは彼は言っていない。

ハーバーマスは歴史的運動法則について述べるが、これは注目すべきことである。なぜならザイフェルトが自著「科学理論」の中で科学理論の問題としてそれを論述しているからである。ハーバーマスは大体次のようなことを言う。歴史的運動法則には包括的であると同時に制限された妥当性が求められる。その法則はある時代、ある状況の特殊な連関を捨ててしまうのではないので、普遍的には通用しない。歴史的運動法則はその都度具体的な適用領域にかかわる。この領域は、一回しか生じない不可逆的な出来事として、これが展開する過程の中で、したがって事態そのものの認識の中ですでに明らかであり、単に分析によってそうなるのではない。また弁証法的法則は個々の機能の関係や孤立した連関の関係をとりあげるのではなくて、総体性とその契機という依存関係を把握する。すなわちある社会生活の世界、ある時代状況全体が総体性として規定され、この総体性とその契機の中で働いているという依存関係

を把握するのである。このことはアドルノが社会科学の諸法則の普遍性はつねに本質的に歴史の上で具体化された普遍的なものと特殊なものとの関係にかかわると言ったことにつながる。そして社会科学における歴史的合法則性は行動する主体の自覚によって媒介されて達成されるようになる運動のことであり、同時にその合法則性は歴史上の生活連関の客観的意味を表現しようとする。その限りで弁証法的社会理論は解釈学的なものとなる。

ハーバーマスは、悟性的思考は科学研究の中で働くのが決まりのようになっていくが、その思考に弁証法はさしあたり結びつき、その思考を肯定するけれども、しかし弁証法はその思考、つまり科学の分析的経験的な方法をその内面から、すなわち内在的に批判しなければならないと言う。この主張はヘーゲルのものでもあり、ヘーゲルは大論理学（論理の科学）の中で当時の形式論理学、自然科学的方法の内在的批判を行っている。しかしハーバーマスは記号論理学の内在的批判を行ったと言うことができるであろうか。

次は価値自由についてのハーバーマスの見解に触れよう。価値自由の要請はポパーの考えに従えば、事実と決断との二元論から来ている。事実あるいは事実認識に関連する面では、自然のおよび歴史的現象の領域内には経験に基づいて規則的であると言えるもの、すなわち自然法則があり、決断に関連する面では、人間の行動の規則、つまり社会的規範がある。事実と決断の二元論、自然法則と社会的規範との分離は、自然法則を考え出す合理主義が決断され、採用された結果生じたものであり、しかもその合理主義の実際の効力を発揮させなければならないために現れたのである。したがって事実認識のために、また自然法則獲得のためにすでに決断と社会的規範すなわち、事実認識、自然法則獲得をしなければいけないという社会的規範とがあったのである。

経験科学上の基礎命題の妥当性については少しも疑念を抱かないのが普通である。たとえば「ここに一杯の水があ

る」という基礎命題はその事実が確認されるならば疑われない。しかしこの命題すらも法則仮説をもっている。「杯」「水」というような普遍的表現は一定の物体がすべて一定の法則に適合した性質をもっているという仮定から出て来るのである。つまり杯とはこれこれのものであると定義して法則化しても、それは無限の事例をふまえて定義したわけではないし、実際にできない。だから基礎命題でも法則仮説を含んでいる。この仮説はつねに是認されるのだという信念に支えられているのである。基礎命題が経験により妥当されるようになるということ、したがって法則仮説と経験科学上の理論全体とが確實なものだというのは人間行動の一種の成果である基準にかかわっている。この基準は労働（勉強）集団の間主観的連関のなかで強い力をもつが、その連関はまさに人間そのものである。それは人間の相互作用、相互影響を含み、同一の決断内容を示し、一定の基準を決定するのである。ここには分析的科学理論では見過ごされた解釈的な事前了解があり、人間の生活関係もある。分析的科学理論の価値自由の要請は技術的自然科学的認識関心にだけに制限されてその生活連関を度外視しているのであるが、かえって逆にそのように要請する人の生活連関が現れているのである。これに反対して生活連関の度外視と生活連関の出現とは意味段階が違うのではないか、すなわち度外視の意味は出現の意味をもたないのではないかと言う人がいるかも知れない。しかし言葉の意味だけを考えるのではない。意味を問題にしている人間そのものはここでは消滅しないから度外視が現われるのである。先述の事前了解というそれは不完全なもの、役に立たないものと分析的合理主義者から批判されることがあるが、その合理主義自体すでに方向の決められた予定通りの見解によって制御されている。これこそ事前了解の現出そのものである。以上のようなハーバーマスの見解に対するアルバートの反論が「全体的理性の神話」という題で展開される。

アルバートの反論を述べてみよう。いわゆる実証主義的科学理論は技術的使用と実践的使用とを同一視し、そのため包括的実践的な問題を狭い技術的な問題にして、自然科学的となった社会科学の有用性の限界を認識しないという点に危険があるとハーバーマスは考える。これに対してアルバートは主張する。認識の領域内で価値自由な、つまり価値の入らない純粹理論に限定する実証主義に対応する弁証法理論は実践の領域内で無反省で恣意的な決断主義である。しかし筆者の考えでは、それは極端な場合の決断主義であり、弁証法理論には当てはまらない。またこの理論においては反省は極めて重要であり、これによって実証主義の基盤に決断のあることが見抜かれるのであり、またその理論は恣意的な決断主義というよりも、必然的に生じてしまった決断であり、これを実証主義もたざるをえない。

ハーバーマスは総体性の意味を明確にしようとしないとアルバートは非難する。ハーバーマスは全体は部分の総和以上のものであるという命題によって全体を有機体論的に把握することを禁じているというにすぎないとアルバートは言う。また全体は記号論理学のクラスではないともハーバーマスは言うが、これに対してアルバートは直接に反論していないが、もちろんこの人が賛成するはずもない。筆者の見解では、アルバートはあくまでも記号論理学的分析の枠内で全体と部分とを分けた考えでもってハーバーマスをみているので、ハーバーマスの主張に対して不満であり、それを認めない。しかしながらハーバーマスも弁証法的全体が形式論理学を乗り越えていると言うからには、記号論理学の現状ないし知識をふまえて論述すべきである。社会科学は歴史の変遷につれて、また世界の各大学、各研究所等で種々研究されているわけだが、人間が研究し続けること自体、全体には達していない証拠であり、だからこ

そへーゲルは全体は過程であるという考えになるのである。社会は生活世界の全体であると言う時、それはそれで定義されているが、それにもかかわらずその定義の中にありながら、それからもれてしまう未知の社会的現実があるとも言えるが、未知であっても生活世界の全体の中に包まれている。定義により社会を明確化するというよりも、研究者が人間の生活世界全体を見失わずに、その世界を研究し続け、敵対した理論であったならば、社会研究向上にふさわしい場、たとえば学会で、あるいは学術雑誌上で真剣に討論をして何らかの結論を出さなければならない。それでも理論が対立したままであったならば、それを支持する研究者がさらに研究をして、できるだけ多くの研究者を納得させるように努力していくことが肝要である。この反省に立ってこそ、社会は生活世界の全体であるということが生じて来る。

ハーバーマスの総体性の概念は論理的には分析できないとみなされてしまうとアルバートは言うが、内容から離れた形式論理学的立言に総体性の意味を還元することはできるし、形式論理学的方法で総体性を処理することはできると筆者は考える。しかし、そのようにしても総体性の重要性を否定したことはない。なぜならば総体性の内容が分析により形式論理学的には明確になるが、その内容が抹殺されてしまうわけではないからである。内容も抹殺されるならば、まさに形式と内容の相入ということになり、このことは形式論理学の主張しない事柄である。しかしまた弁証法理論の主張することであるから、総体性の形式が抹殺されてしまうのであろうか。その抹殺ではなくて総体性の明確化、総体性の反照理論の確立が必要である。たとえば他者は他者であるが同時に自己であるという考えの現出である。

アルバートは言う。仮説的演繹的体系（ホバーの思想）は個々の適用領域に無頓着であり、それは対象を偽造す

る、つまり対象について偽の命題を提示することになる。その体系の普遍的方法論は対象構造をなおざりにし、この構造に入り込めない理論はくだらないものだとかハーバーマスは述べると。ハーバーマスのこの考えは社会的な生活連関における個々の生き生きとした社会現象を把握しようとするところから生じたものであるから、そう述べるのは当然であるが、さりとて仮説的演繹的体系が対象を偽造するとハーバーマスが言いすぎるのは疑問である。

理論的な実在科学の方法論は実在の構造、それと共に実際の出来事の構造に関する合法的な連関を考え出すことであり、またその構造の仮説を立て、それを表明、報知することでもある。経験によるその連関の制御、つまりテスト更にそれに基づいた予測も行われるとアルバートは言うが、この際、われわれが事前にもっていた知識、すなわちハーバーマスの主張する社会生活の世界を忠実に解釈したものが疑わしくなるとアルバートは言いたそうである。そしてアルバートは、われわれが立てた理論が事実には照らして捨てられるならば、われわれが間違つたわけであるが、この間違いを通して種々学ぶ事柄があり、ここから技術的成果をあげて現実構造をよく把握しようようになるという。ここでの論争点は解釈学における事前にもっていた知識、事前了解はテストによって真か偽になるか、あるいは真偽未決定（三値論理学の意味で）となるのではないか、事前了解だけでは現実を完全に認識したとは言えないのではないかということであろう。しかしそのテストも実は事前了解によって生じたものである。また事前了解であるテストするものが恒真であるとするならば、その恒真はテストにおいて当為の働きに変わってしまう。その限りでヘーゲルの次の考えがそのことにつながって来る。アルバートがヘーゲルの思想を拒否するのにもかかわらず。善い、悪い、真である、美しい、正しい等の述語が表現することは、事態がその述語の普遍的概念と比較され、検討されて、その概念が当為として前提されてしまっていること、すなわち事態が当為と一致しているかどうかということであ

る。ヘーゲルの述べるこの当為がまさにテストするものである。技術的成果をあげて現実構造をよく把握しても、社会科学の研究がそれで終止符を打つとは言えないし、また社会が理想的なものにはならない限り、理想、思弁の事前の解釈は必要であらうし、ここに価値としての当為が現れてしまう。アメリカのベトナム戦争への参加、ソ連軍のアフガニスタンへの進攻は現実構造をよく把握した結果であったとしても世界平和のためには疑問とならざるをえない。そこには平和維持のために戦争をするという利己主義的な当為がある。

アルバートは、分析的方法を素朴に弁護する人が自分の考え出したカテゴリーの適合性を確かめるのに、その人がそのカテゴリーを働かせている理論を厳密にテストしているのであると言うが、これではハーバーマスに対する反論にはならない。なぜならばテストする前の了解、知識、解釈がすでにそこに入っているからである。もちろん、アルバートの言うように自然科学が日常経験によって生じた知識を疑問視し批判したことから、また常識に矛盾していても、この常識にさからって真であることを示した理念の影響を受けて自然科学が生じたことは確かである。常識が事前了解であると言えさうであろう。しかし常識が総体性の解釈学的先取りではない。ヘーゲルもエーテルという語で学が常識より高次であるということを示している。ある理論の真偽を部分的テストで決定するのも危険であろう。分析的経験的方法是経験の一つのタイプにすぎないというハーバーマスの批判に対して、アルバートはその批判に対する反論を次のように述べる。ハーバーマスは極端に狭い経験概念を取り扱っているが、分析的経験的思考は理論形成をするためには経験の制限をしていない。ハーバーマスの自然的解釈学の方がむしろ制限されたものである。進む方向が固定された経験をハーバーマスは批判するが、その経験は理論を事実に基づいてテストするという一定の課題にとつては重要である。以上のアルバートの反論は首肯できるが、分析的経験的思考が悟性の立場に立っている点

に対するハーバーマスの批判であり、それをヘーゲルの弁証法的理性にのっとった論理を強調するならば、ハーバーマスの主張は強力になるであろう。アルバート、ハーバーマスは共に制限された思想であると批判し合っているのだが、それは当然である。なぜならば、両者共に「私は考える」を前提にしながら、それを省略していて、相手を批判する時にのみ「私が考える内容」結果的には「私は考える」を攻撃しているからである。筆者は先述の「一定の課題にとって重要である」は認めるが、これはまさに制限である。「私」は制限をしながら、しかもこのことにおいて過去の制限や「私が考える」の「私」の制限を越えて普遍化して語る。制限をした根拠、あるいは制限をした結果生じる成果の反省、反照問題を考えるところに人間の理性があるのではなからうか。

なぜ弁証法的思考は原理的にテストしうる理論に変えられてはいけないのであろうかとアルバートは問う。アドルノもハーバーマスも社会現象それぞれが総体性に依存していることをテストすることはできないと主張するが、このことに対してアルバートは反論する。結局アドルノ、ハーバーマスの考えは、すべてのものは何らかの方法ですべてのものとながりがあるという理念しかない。このような理念に立った何らかの見解が方法的な利点をどの程度まで獲得されるかが証明されなければならないと。ヘーゲルの「真なるものは全体である」という命題は實在論的傾向をもつニコライ・ハルトマンも認めるが、アドルノは全体は非真であると言って、ヘーゲルに挑戦する姿勢をとる。しかしアドルノはヘーゲルの思想をまったく拒否したとは言えない。なぜならばアドルノが自分の主張を重要視すれば、それは「私」すなわち「自我」の重要視であり、その限りでそれはヘーゲルの中にあるものであるからである。とにかく全体は総体性であり、全体は全体自身の発展によって自身を完成する実在であるともヘーゲルは言う。筆者の考えでは一定方向をとったテストを行えないことはないだろうが、それは全体を部分に置き換える結果となっ

てしまう。すべてのものはすべてのものにつながるという理念はヘーゲルの非難としては的はずれである。方法論的理念の証明をするのは実際に諸種の具体的な事柄を考えていく中で明らかにするのであるから、記号論理学的（二値論理学的）数学的証明のようにはできないであろう。こういうと筆者は記号論理学を必要としないようにとられるがそうではない。やはりその論理学は必要であり、形式的に弁証法がいかに捉えられうるかは考えなければならぬ。ここから人間論理を掘り下げなければならぬと考える。

アルバートは言う。総体性の解釈学的先取りが事態そのものに適合した概念として解釈をしていく中でいかにして正当なものとして示されるかということについては説明されていない。またヘーゲルの概念が強調されるのを疑問と思う。ヘーゲル哲学は難解であり、見かけ上の厳密さを持ち、まやかしの証明法を行うと。右の解釈学的先取りを解釈していくそのことがその正当性を示していくものである。ハーバースはアルバートの言うように説明していないが、筆者の考えでは、たとえばある理論の図式化、記号論理式化、数学化はそれ自体解釈学的先取りを示しており、その先取りが真であることを上述の図式化等が示したと言えるが、このことは図式化等の真を創造して先取りしたことを逆に示しており哲学にとって極めて重要であり、科学理論の課題でもある。ヘーゲル哲学についての批判は感情的に難癖をつけたようなものであり、反論するに値しないが、一つだけ言うならば、ヘーゲルは実証主義（肯定主義）ではなく、いわば否定主義であるから、この立場になければ、ヘーゲルはたわけたことを言っているとみなされるだけであろう。

アルバートは、ハーバースの歴史法則の論理的構造はどのようになっていて、その法則はどのようにしてテストしうるかと問う。これはすでに記号論理学的分析を前提にし、またテストしなければいけないという当為に立って質

間をしているので、弁証法理論の外に依然として立っている外在的批判の形がとられている。アルバートは克服されるべき主観的解釈学から客観的意味に進むのにどのような方法があるのかも問う。ここには主観的なものと客観的なものが区別されて問いとなっているが、後者は間主観的なものと言った方がよいであろう。したがって客観的なものが主観的なものとなるわけである。克服されるべき主観的解釈学と言っているが、仮りにテストに耐えた解釈（意味）があったとしても、それは、完全無欠なすべてのテストを受けたわけではないから、やはり克服されるべき可能性をつねにもっている。だからそれは可能性であるにせよ克服されるべきものである。ここには解釈が真であるという間主観的決断が必要である。

アルバートによれば、総体性というものは恣意的な決断を客観的認識としてしまうのに役立つ物神（超自然的な力をもつもの）として宗教的崇拜の対象となる木片、石など）であり、弁証法的思考は任意の決断に認識という仮面をかぶせて、それを正当化し、しかもなるべく検討させないようにするとなる。またアルバートはポパーが合理主義的立場をとるということは合理的論証を行う以前にあるので、非合理的なものと言えらる決断であると言う。総体性は日本語を通して考えると分りやすいと筆者は考える。すなわち人間は人間である限り、世間の中にあり、同志であっても、敵であっても、どちらでなくても他人と共存し、コミュニケーションがあってもなくても、そこに間柄がある。このことに関心が向いていたから総体性という語が付けられた。それによって人間の社会、つまり人間が生きている人間独自の空間、時間のうちに包まれた人間の集りが表されたのである。どんな精密な分析を行っても漏れてしまうものがある。網目をいくら細かくしても水が漏れるように。漏れなくするにはバケツのようなものに水を入れるより外に方法がない。しかしそれでは分析にはならない。分析できるが、できないものもある生活社会が総体性と呼ばれるの

である。ところでアドルノは社会は複雑に入り組んだ網目であると言っている、社会は水でなくて網目であると言えながいずれにしても整然とした論理で捉えられない事柄を社会は含んでいると言いたいのであろう。だが筆者は社会が唯物論的実在とは考えない。社会は実在しているという場合、すでにそれを問題にしている「私」すなわち「自我」がそこに介入し、社会は自我にかかわってしまっているからである。アルバートが弁証法的思考は任意の決断に云々と言うのは反対である。その思考は討論をできるだけ行うことによって、多数の人間により一定の決断をするのである。ポパーが合理主義的立場をとる云々は「立場をとる」ことにおいて自我が問題に組み込まれていることが分る。

ハーバーマスは「実証主義的に二分された合理主義に対する反論」という題でアルバートに批判を与える。ただしこれまで述べた意味の繰り返しが多いようである。

アルバートによると仮定はつねに再検討できなければならない。そのために経験が必要である。この経験は一定のタイプのもの、すなわち実験やこれに類する処理方法に限られた感覚経験なのである。そしてテストとはその経験に即して理論をできる限り再検討することである。

ハーバーマスの弁証法的理論によると、事実はあるがままのものとして産出されたものである。つまりそれを弁証法的概念として理解する。そこで実証主義の事実概念は媒介されたものであるにもかかわらず、直接的なものであるとしてしまい、その限りでまさにそれは仮象になっているとハーバーマスは言う。このような表現はヘーゲルの

理論であるので、ハーバーマスはヘーゲルの思考から抜け出してはいない。このことはきわめて重要である。なぜならばハーバーマスは新マルクス主義者と呼ばれているからである。

ハーバーマスは解釈学的に解釈を進めていく過程の中で、定義付与以前の事前了解の段階で生じた基準が修正されと言う。ここには過程の重要性が示され動的思考が展開されるわけである。また彼はもちろん実証主義の方法をとるのではなくて、主体によって行われる研究過程は認識行為を通じて認識されるべき客体的連関に属するという考え方をとる。これは主体の恣意により勝手に客体を空想したり、偽造してはならないことを意味している。その限りで主体への反照である。なぜならば彼は主体による研究過程と社会的生活過程との関係を形成させる次元は事実の領域にも、理論の領域にも属さないと述べているからである。その次元はドイツ語では *Dimension* であるが、広がり、範囲の意味でもある。日本語の次元になると物事を考えたり話したりする立場の意味もある。この両者の間における差がわれわれにとって現れる。ハーバーマスの解釈と共に解釈者の哲学が出るのは当然であり、間はつながることに依りて相違、一致をとり、より本質的な場へ進んでいく。ハーバーマスが「客体的連関に属す」と言った時、實在論的傾向が出ているが、このこと自体彼の抱く根拠への反照である。ハーバーマスによると、思考が弁証法に巻き込まれるのは、思考が形式論理学の規則を軽視するからではない。思考が自己への反照の場合でも、かたくなにその規則に依存している間に、その思考が弁証法に巻き込まれると言う。この表現は適切ではない。なぜならば形式論理学は規則の外に公理もあるからである。また思考が対象への反照と自己（自我）への反照との上に同時に立ちながら、形式論理学の公理、規則に依存するその時すでに弁証法に入り込んでしまっているのである。

アルバートは「実証主義の背後にかくれるのは誰か」という論文でハーバーマスを再批判する。ポパーもハーバーマスと同様に実証主義的解釈に反対しているのだとアルバートは言う。しかし実証主義という肯定主義の影を引きずっていることは確かである。たとえばポパーの反証可能性 (Falsifikation) は虚偽を実証することであるが、実証できない限り仮定は肯定されている。弁証法のいわゆる規定された否定は規定である限り一定の制限されたものであり、制限されないものの肯定を含むことになるが、否定している時には否定があるだけであり、否定がすべてである。

アルバートはハーバーマスも自然的解釈学に制約されていると反論したが、ハーバーマスはそれに答えてくれないと言う。ハーバーマスの立場にはない筆者が答えるとするならば、もちろんそれは制約されている。しかしその質が異なる。なぜならばそれは批判的合理主義をも包み込んだ解釈学、つまり諸種の思想をもつ人—間による人—間についての解釈学を考えるからである。これはもちろん筆者の立場をその解釈学に入れた場合である。

アルバートの反論は続く。弁証法論者は与えられた諸種の社会的事実に注目するよう指示することによって、研究上の論理の問題が処理できると考えるならば、まさに実証主義者、肯定主義者になっている。それなのにハーバーマスはそれについて何も語らないとアルバートは言う。与えられた社会的事実をそのまま受け取る限り確かにそうかも知れない。しかしながらその社会的事実をそのまま認めていないから批判がある。受け取るのは即目的なものであり、それが直ちに否定される。また受け取った事実を受け取った限り肯定であるが、しかしその事実は無の物ではないから、それ自体すでに肯定の否定となる。事実の一断面だけに思考を限ることは学問的態度とは言えない。学問は問いをもつ、事実の根拠を問う。そこに社会批判があるのである。

アルバートは言う。ヘーゲルの著書はところどころ何が語られているのかよく分らないし、適切に判断することもできない。これはヘーゲルの思想が難解であることを言っているのであるが、しかしヘーゲルがたらめな支離滅裂なことを述べているとは言えない。ヘーゲルを専門に研究した人は何が書いてあるか分っているし、一定の意味を汲み取っている。アルバートのそのようなヘーゲル批判は感情的な敵意すら感じる。

ハーバーマスは弁証法よりも、むしろ分析哲学の領域に入った研究と思われるものを論拠にしているとアルバートは言う。一般的に言って弁証法は分析的思考をふまえながら、それを突き抜け超え出て行くのであるから、そのような論拠はありうる。

最後にアルバートは言う。弁証法はどこに本来その本質があるのか。弁証法は他の考えと比較してどんな長所をもっているのか。それはどんな方法を使用するのか。これらの問いにハーバーマスは自分の論文の中で答えていない。しかしこれまでの筆者の論述によってその概要が示されたと思う。

ピロートは「ユルゲン・ハーバーマスの経験により反証可能な歴史哲学」という題でハーバーマスを攻撃する。ピロートは言う。弁証法的思考は諸矛盾の中からすべてのものが出て来るから内容が空虚であると。これはあまりにも安易な批判であり、弁証法の中へまったく入らないで非難しているだけである。もっとも記号論理学だけが唯一の論理であるという信念をもっているならば、信念の吐露の一形態として理解できる。

ピロートはまた主張する。純粹の解釈学はイデオロギー的性格をもつ。この性格は事前了解（先人見）が客観的な

強制力をもつならば現れる。そのイデオロギー的性格から離れた解釈学の方法論的規則がおのずから強制力を生じるためには、その規則に分析的科學理論の規則が付け加えられなければならない。しかし分析的科學理論の中へそう言った時すでに定説のないし探究的解釈⁽¹⁾が入り込んでいる。それゆえにピロートのように言えるのである。また事前了解は單なる判断以前 (Vorurteil) のものではなく、すでに理解されたある事情全体に対して理解を専有して動き、理解しながら存在する予持 (予めもつこと) である。⁽²⁾「客觀的強制力」を分析的科學理論が与えるというよりは、それぞれの当該専門科學によってそれぞれの科學の中で強制力が出て来るのであるが、人間全体に対する強制力ではない。また科學の發展は「客觀的強制力」の確立によって示されるにしても、それ以前の獨創力、創造力、ひらめきから始まることを無視してはならない。これらが科學の發展力だからである。

ピロートの考える分析的科學理論は嚴密な形式論理學の場に立つて論述するので説得力がある。しかしそれゆえに既述のように弁証法論理の中へ込めて批判しているとは言えない。その中へ入らなければ弁証法論理を分析し理解しやすくしたとしても、その限りでその論理の内容を否定排除したことはない。分析的科學理論で弁証法論理を精密に分析したら、後者は前者の中に包含されてしまうことになるのであろうか。弁証法論理から考えれば、形式論理學を基盤にしながら、そこにおいてそれを批判するのである。このことはすでにヘーゲルが行った。ところで弁証法論理を基盤にした形式論理學的表現は可能であり、事実それを試みたいいくつかの研究がある。この中ではゴットハルト・ギンターの研究が最も注目に値するであらう。しかしここではそれを考える余裕がない。(筆者はすでにいくつかの論文で彼について述べたことがある。)

城塚氏は科學者の相互に敵対する作業、相互に共同し合う作業を主張するポパーの考えを高く評価し、「論争」も

そのような作業であると言う。確かにそうかも知れない。しかしそれを認めると城塚氏はポパーの批判的合理主義の一つの主張を認めたわけであり、城塚氏個人の中で共同と敵対が共存するであろう。このことをどのように解決するのか今後に期待したい。また共同作業と言っても、敵対する作業は必ずまとわりつく。たとえば「論争」におけるように批判的理論者と批判的合理主義者とは相互に敵対するから、両者のそれぞれの思想的に共通した立場の人々が結束する。また敵対するからますます共同結束する。このことは国際哲学会議でもよく見られる。人間は一人で生きていないし、一社会、一国家で存在しているわけでもない。また研究者はロビンソン・クルーソーのように一人で研究しているわけでもない。人間は敵対、共同関連から免れないが、この二つの関連を「間」が示している。敵対的な作業とは共同の場合、共通の土俵、共同の討議、その限りで共同の作業が人間にとって必要であり、また敵対と共同との作業についての超越論的な根拠を考え出そうとするのも人間である。国際哲学会議、各種学会、会議も自己主張、自己反省、自己批判、自己の立場の明確化、これらの場であり、そういうことをするのに都合な機会、時であり、他者を考え直す、あるいは認める場、時でもあり、学問の向上に不可欠な集会に参加する研究者達が諸意見を真剣に誠実に考えて賛成、反対する場合、時であり、それを契機にして自己の思想を深める、あるいは発展させる場、時である。これらの場合、時をまさに人間がもつのである。弁証法的理論と分析的理論との間に不毛の論争を認めるのではなく、論争を通して「自分で」考え抜いてみる必要がある。そのためには筆者がここで示して来たものを反芻してもらいたいと思う。人間における間の構造が体系とは違って、思索の手がかり、端緒、豊かな創造力を示すことになっていくのである。

なお河出書房新社出版の訳書「社会科学の論理」はよく訳されているが、疑問と思われる訳もある。このことは

解釈学的な問題となるので、そのいくつかをあげておこう。

- (1) S. 71, ...so ordnet generell Wertneutralität unreflektiert dem sich unter, was den Positivisten geltende Wertsysteme heisst. (70頁左から8行目「一般的な価値中立性は、実証主義が妥当する価値体系と呼ぶものに無反省に従属することになる。」——部分は「一般的に」もしくは「一般に」、「実証主義者に妥当する」となる。
- (2) S. 91, Die Allgemeinheit der sozialwissenschaftlichen Gesetze ist überhaupt nicht die eines begrifflichen Umfangs, ... (96頁左から5行目「社会科学の諸法則の普遍性は一般に、個々の断片がびったりとはめこまれる概念的外延の普遍性ではなく、...」——部分は「決して」でなく」である。169頁左から8行目にも同じ間違いがある。
- (3) S. 136, πρωτου ψευδός (142頁右から9行目「第一の虚偽 (πρωτου ψευδός)」) 原典の間違いがそのまま訳書にも現れている。それは πρωτου ψευδός である。
- (4) S. 138, ...καρπός... (144頁右から11行目「καρπός」) 原典の間違いがそのまま訳書にも現れている。それは καρπός である。
- (5) S. 143, Die reductio ad hominem, ..., hat zur Substanz jenen Menschen, der erst herzustellen wäre in einer ihrer selbst mächtigen Gesellschaft. (150頁右から5行目「人間への還元が実体としてもっているものは、それ自身強力な社会のなかではじめて形成される人間です。」) は「人間への還元には、この還元をおさえついている社会の中でまず回復されねばならない人間が実体としてあるのです。」となる。
- (6) S. 157, ... wir in einem syntaktisch verbindlichen Rahmen beliebig konstruieren. (163頁左から9行目「

文章論的に拘束されている枠内で、われわれが任意に構成する……)——部分は「構文論的に拘束されている枠内で」であり、文法における文章論ではなくて、記号論理学における構文論が考えられている。

- (7) S. 181, ... Handlungserfolg..., der sich in dem von Anfang intersubjektiven Zusammenhang arbeitender Gruppen sozial eingespielt hat. (185頁左から2行目、はじめから間主観的な連関のなかで労働している集団が社会的に習得してきた行動成果…)は「労働集団というはじめから間主観的な連関のなかであって、社会的に強い影響を与えている行動成果…」とならないであらうか。

- (8) S. 198 ... in dem streng dialektischen Sinne..., der es verbietet, das Ganze organisch aufzufassen nach dem Satze: »es sei mehr als die Summe seiner Teile.« (203頁右から7行目、「全体は部分の総和以上のものである」というような有機体論的な把握を禁ずる」のような意味で…)は訳語がぬけている。それは「全体は部分の総和以上のものである」という命題によって全体を有機体論的に把握することを禁ずる…」である。

- (9) S. 204, ... gegen den »gesunden Menschenverstand«... (207頁右から2行目、…健全な人間悟性…)——部分は良識である。

- (10) S. 249, ... die Kritik weit davon entfernt, die genannten Unterscheidungen zu ignorieren; (254頁右から7行目以下、批判はいわゆる区別を無視することにはけりしてならない。)——部分は「上述の区別」である。

- (11) S. 250, ... zwischen mehreren theoretischen Ansätzen ... (254頁左から5行目、多数の理論的着想のあいだでの…)——部分は「いくつかの」であり、「多数の」ならば viel でなければならぬ。

- (12) S. 310 Dialektisches Denken ist inhaltsleer, weil es sich in Widersprüchen bewegt, aus denen alles

folgt, ... (313頁左から4行目、弁証法的思考は、そこからあらゆることが結論として導かれるような諸矛盾のうちに動いているがゆえに、内容空虚である。) 訳文の中の——部分は「弁証法的思考」を指しているようにとられてしまう。それは「弁証法的思考は諸矛盾の中で動いていて、諸矛盾からあらゆることが結論として出て来るから、その思考は内容空虚である。」となる。

(13) S. 315, ... die formallogische Negation einer Kontradiktion ist immer eine Tautologie ... (335頁右から3行目以下、形式論理的な矛盾の否定はつねに同語反復トートロジーにすぎず、...) は「矛盾の形式論理学的否定は恒真である」となる。

(14) S. 338, ... »große Philosophie« ... (345頁左から5行目、「大哲学者」は「偉大な哲学」である。

注

- (1) 拙論「一般科学理論と社会科学(2)」早稲田人文自然科学研究第19号参照
- (2) Heidegger, Sein und Zeit, S. 150.